参加者募集要項

海外事情研究所主催・高大連携事業

東京外国語大学
夏期世界史セミナー
―世界史の最前線Ⅵ―

東京外国語大学では、本学の世界各地域の歴史学担当スタッフによる最新の研究成果を公開するとともに、高校で世界史教育を担当する先生の方々との対話を通じて世界史教育に新たな視座を示すことを目標に、今年度も2日間のセミナーを実施します。今年は、2日目の昼休みに意見交換会、入試説明会を設けます。皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2014年7月29日(火)～30日(水) 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 227(予定)

プログラム

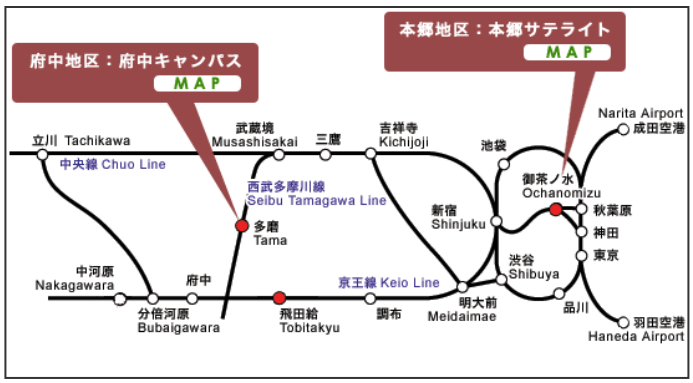
※今後の調整によって、多少、変更になる可能性もありますので、ご了承ください。

1日目	29日(火)	9:00～9:30	受付
		9:30～9:40	海外事情研究所所長挨拶(吉田ゆり子)
		9:40～10:40	「聖人崇敬から見た中世ヨーロッパ―大天使ミカエル崇敬を中心に」(千葉敏之)
		10:40～11:00	質疑応答
		11:00～11:10	休憩
		11:10～12:10	「風刺画から見る20世紀初頭の世界」(小松久男)
		12:10～12:30	質疑応答
		12:30～13:30	昼休み
		13:30～14:30	「モンロー宣言と戦争を終わらせる戦争」(金井光太朗)
		14:30～14:50	質疑応答
		14:50～15:10	休憩
		15:10～16:10	「伝単からラオス内戦をみる」(菊池陽子)
		16:10～16:30	質疑応答
2日目	30日(水)	09:00～09:30	受付
		09:30～10:30	「南大西洋の世界:ロビンソン・クルーソーの航海再考」(鈴木茂)
		10:30～10:50	質疑応答
		10:50～11:10	休憩
		11:10～12:10	「「アラブの春」における希望と苦悩」(名誉教授・藤田進)
		12:10～12:30	質疑応答
		12:30～14:00	昼休み意見交換会・懇親会(学生会館ホール)
		14:00～14:40	入試説明会
		14:40～15:40	「時代のなかの農業史研究―『農本主義』を手がかりに」(野本京子)
		15:40～16:00	質疑応答

参加条件・申込み方法等

日 程　2014 年 7 月 29 日（火）、30 日（水）
2 日間

会 場　東京外国語大学　府中キャンパス
（東京都府中市朝日町 3-11-1）
西武多摩川線「多磨」駅より
徒歩5分、
又は京王線「飛田給」よりバス



対 象　高等学校、
予備校の世界史担当教員

受付期間　2014 年 7 月 16日(水)まで

受講料　無料

懇親会　無料

応募方法　同封しました申込書を FAX にてお送りください。
同じ高校で複数の方が申し込まれる場合は、申込書をコピーしてご利用ください。
なお、宿泊が必要な方は、事前に宿泊先を確保した上でお申し込みください。

[お申込み先]

東京外国語大学　戦略支援室
〒183-8534
東京都府中市朝日町 3-11-1
TEL:042-330-5158
FAX:042-330-5155

[お問い合わせ]
吉田ゆり子（海外事情研究所所長）
ifa@tufs.ac.jp

[企画・運営]
東京外国語大学　海外事情研究所
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html

プログラム１日目

千葉敏之「聖人崇敬から見た中世ヨーロッパ—大天使ミカエル崇敬を中心に」

キリスト教は通例、一神教であると説明される。しかし、一人であるはずの神は父・子・聖霊という三つの位格（三位一体）を持ち、子キリストは人の姿に受肉する際、人間の女性マリアの母胎を借りた。父は神であるが、母は人間マリアであり、マリアは死後昇天して、戴冠されることで、「神の母」としての座を与えられた。これらの神的存在（神性）の下にはさらに、夥しい数の聖人・聖女の群れが存在した。ダンテ『神曲』の天国篇に描写されるように、天国は幾重もの階層から成り、各層にはその聖性に応じて天使・聖母・聖人が位置を占めた。この厚みと多様＝多層性をもつ神性の塊こそが、キリスト教の神であった。

本講義では、中世ヨーロッパにおける神的存在（聖人、天使など）のあり方について整理しつつ、このような神性が必要とされた理由を、大天使ミカエル崇敬を中心に、その社会的機能の観点から考察する。

小松久男「風刺画から見る 20 世紀初頭の世界」

1906 年、帝政ロシアの南部、コーカサスの中心都市ティフリス（今のグルジアの首都トビリシ）で『モッラー・ナスレッディン』という風刺雑誌が創刊された。モッラー・ナスレッディンとはトルコ系の人々に広く知られるとんち話の主人公である。ムスリム（イスラーム教徒）知識人が発行したこの雑誌の特徴は、カラー版の風刺画を巧みに用いたことにある。その製作にはティフリス在住のドイツ人画家の協力もあった。これらの風刺画は、20 世紀初頭の世界、たとえばヨーロッパ列強によるアジア・アフリカの植民地支配、隣接するイランの立憲革命やオスマン帝国の青年トルコ人革命、イスラーム世界の従属化を鮮明に映し出すとともに、イスラーム社会の抱える病弊を旺盛な批判精神をもって描き出している。今回の報告では、興味深い風刺画を紹介しながら、ムスリム知識人から見た 20 世紀初頭の世界を考えてみたい。これらの風刺画は教材としても有効と思われる。

金井光太朗「モンロー宣言と戦争を終わらせる戦争」

第一次世界大戦に参戦するときに、ウィルソン大統領はこれが戦争を終わらせる戦争だからアメリカは参加すると正当化しました。しかし、有名なクラウゼヴィッツの『戦争論』では、「戦争はもう一つの手段を以てする政治である」と規定しています。ヨーロッパの国際法秩序では、紛争解決に要すれば戦争することで秩序を回復するものだったのです。戦争をなくせば紛争の火種が残り続けることになります。アメリカにとって、戦争をしなくても秩序が保てる世界、それが西半球でした。そこは大小強弱があるとしても、人民の意志に基づく共和国が公正な秩序を求める世界です。戦争が選ばれるはずはないのでした。そうした西半球の国際秩序を正当化し、ヨーロッパの主権国家体制を否定したものが，モンロー宣言に他なりません。そして、両大戦を経て西半球的な国際関係がグローバル化します。「アメリカの世紀」とはそうした原理的な転換を意味するものです。

菊池陽子「伝単からラオス内戦をみる」

第二次世界大戦後の植民地からの独立、国民国家建設の時期と東西冷戦が重なった東南アジアでは、程度の差こそあれ、国内の政治状況に冷戦構造が影響を及ぼしましたが、なかでもインドシナは冷戦が熱戦となった地でした。インドシナというとベトナムだけが注目されますが、ラオスもベトナムと同様、アメリカからの空爆を受け、国土が戦場と化しました。そして、国際的にはラオス王国だけが承認されていたため、ラオスでの戦争は内戦と呼ばれていますが、1954 年のジュネ—ヴ協定以降、ラオスは実質的な分断国家で、統一されたのは 1975 年のことでした。

米軍の作成した伝単を使用して、分断されていたラオスで、どのようなプロパガンダが展開されていたのかをご紹介します。ラオスという国民国家の形成の中で、ラオス内戦を考えてみたいと思います。

プログラム２日目

鈴木茂「南大西洋の世界：ロビンソン・クルーソーの航海再考」

ダニエル・デフォー作『ロビンソン・クルーソー』の主人公は、17世紀半ばに、当時ポルトガルの植民地であったブラジルの総督府がおかれていたサルヴァドール（バイーア）から、「商品管理係」としてアフリカへ向かう奴隷密貿易船に乗り組む、その航海で遭難する。しばしば「絶海の孤島」と表現されるが、作品の中でロビンソンが漂着したのは、南米大陸が臨めるカリブ海・小アンティル諸島の架空の島であった。この作品からは、コロンブスの「新大陸発見」から約200年後の大西洋交易圏の広がりと深化を垣間見ることができ、興味深い。とりわけ、南大西洋の奴隷貿易が、必ずしも日本の世界史教科書に通常登場する「三角貿易」というかたちを取らなかったことも示唆している。19世紀半ばまでに南北アメリカ大陸に奴隷として運ばれたアフリカ人は1000万人～1200万人に登と推定されているが、その約半分は南大西洋を舞台としていた。この報告では、奴隷貿易禁止後の解放民のアフリカ帰還を含め、南大西洋で展開した独自の世界を跡づけてみたい。

藤田進「『アラブの春』における希望と苦悩」

二十世紀初期からアラブ人は全体としての集団的な独立を一度も達成したことはないが、その原因の一部は、彼らの土地の戦略的・文化的な重要性が外部の大国の邪心をそそったからである。アメリカが世界的な優位を確立してから五十年余りになるが、同国の中東政策は、イスラエルの防衛とアラブの原油の自由な流通という二つの原則に基づいて運営されてきた。これらはともにアラブ・ナショナリズムとは真っ向から対立するものであった。今日、アラブ諸国の中で自国の資源を望み通りに自由に処分できる国はないし、それぞれの国益にかなうような立場を取れる国もない。そのような利害がアメリカの政策を脅かすときには、特にそうである。あらゆる面でアメリカの政策は、アラブ人の目標に対しては侮辱的で、公然と敵視するようなものだった。アメリカの経済援助に頼っているアラブ国家もあり、アメリカの軍事力の保護に頼っている国もあり、どの国もみな、お互いに相手は信用しないことに決め込み、また自国民の福祉についてはほとんど考えないことにしている。アメリカ人が唯一の超大国としての横柄さを長いあいだに次第に身につけていくにしたがって、彼らのアラブ諸国に対する扱いは、どんどん悪くなっている。（エドワード・サイード『パレスチナ問題』から）。

上記にみるアラブ民衆の歴史的現実と苦悩についての具体的事実を一 部紹介することを通じて、「アラブの春」を論じてみようと思います。

野本京子「時代のなかの農業史研究－『農本主義』を手がかりに」

「農本主義」とは何か。どのような時代状況のなかで立ち現われ、どのような問題を提起しようとしたのか。農業・農村・農民の重要性を説く思想が近代化・産業化という歴史的過程のなかで登場してきたとすれば、それは日本にのみ限定されないのではないか。セミナーではこのような問題意識に基づき、アメリカにおけるポピュリズム運動等についても言及する予定である。さらに、ある特定の時代状況下の「農本主義」の主張だけではなく、研究史を検証することによって、現代までを射程にいれて考えてみたい。その際に、かつては歴史研究のなかで否定的に扱われていた「家」や「ムラ」が、開発論的視点から肯定的に論じられるに至った近年の研究動向を合わせて検討する。「家・ムラ」論の変化は、「農本主義」研究の変化とも関わっており、「農本主義」そして「家」、「ムラ」に対する評価の推移・変容は、近代そして現代の農業・農村の社会的位置と密接不可分であることを検証したい。